

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 尾上圭介

本論文のテーマは文法形式固有の性格と結果として表現される多義的意味との関係であり、その関係と表裏一体をなす文法・意味範疇の内実とそれらの範疇の成立の基盤である。

本論文の構成と論旨は以下の如くである。第二分冊第一章では、まず、「水」のような名詞的な素材をただちに言語場に投げ出して成立する、述語のない文(喚体)が感動と希求の二つの意味を分化する機構に注目し、そこに文法形式固有の性格が結果として多義的意味を生ずる機構の典型を見出している。そして、喚体の範囲を積極的に用言を素材として言語場に投げ出す場合にも拡張し、「鳥が飛ぶ」のような、動詞や形容詞などの用言を中核にもつ通常の文にも名詞文同様の喚体的な一面を見出し、その文法的意味を追求する方向は、申請者の一貫した立場であり、その論理の整合性と洞察力の深さは他の追隨を許さない。

第二分冊第二章では、戦後文法学界で多くの議論を巻き起こした陳述論の精神、学史を検証し、まず、話し手-聞き手の場での表現の成立を文法的な構造と重ね合わせて考えたところに最も大きな問題があったと指摘する。そして、それに対する無自覚が、主観的なものが階層的により客観的なものを包んで文が成立するという階層的なモダリティ論を生んだと、戦後陳述論の流れを的確に総括し、それに代わるべき文法論の姿を提示している。

第二分冊第三章は、過去や完了などの範疇は、既に現実世界に存在してしまっているものとして事態を捉えることから生まれるものであり、推量や意志などの範疇は、非現実であるものとして事態を捉えることから生まれるものであるとし、時制や叙法の文法・意味的範疇の成立の根拠を新たな視点から明らかにしたものである。

第三分冊第一章では、助詞「は」に認められる対比と題目提示という二つの働きについて、まず対比とは一つの文と別の文との関係のことであり、題目提示とは一つの文の中で前半部と後半部との関係に属するもので、本来別のものであることを確認している。そして、他の係助詞が題目提示をすることなく、「は」のみが題目提示の働きをするのは、「は」が係助詞として前後両項の結合を承認する助詞であり、しかもその承認の色合いが対比性を帯びたものであることの二つが相俟って始めて可能になったものであると結論づける。その論証のくだりには、申請者の文法学者としての力量が如何なく発揮されている。

第三分冊第二章は、日本語の主語として「ガ」格項目を位置づけ、それにどのような種類があるかを考察したものである。中でも、ラレル形の述語文を、個体の運動としてではなくコト全体の生起と見る特別な語り方の出来文として捉えることにより、受身、可能などのラレル形の表わす様々な意味を統一的に把握することに成功している点が特筆される。

本論文は長期にわたる論を集積したものであるため、術語に多少の不統一はあるが、論の一貫性は変わるところがなく、論文としての価値を損なうものとなっていない。以上より、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断する。